Akmy
蒼依空の受難の日々
泡蔵
AWAZO

目　次

序　章 …… 3
第一章 ……15
第二章 …… 35
第三章 …… 67
第四章 …… 89
第五章 …… 111
第六章 …… 129
終　章 …… 153

あとがき……162

序章

1

街の灯りが消え始め、徐々に月の光が強くなる頃――

繁華街では多くのカップルが別れを惜しむように身を寄せ合っていた。

とまぁ、そんなことは表向き。実際は計画的に時間を遅らせる男の下心や、それを知りながら素知らぬ顔で頬を染める女のしたたかさが渦巻いている。

そんなスケベ心丸出しのカップルなど全国どこへ行っても見られるのだから、不況不況と言われていても世の中浮かれている連中がまだまだ沢山いると言うことだ。

都心を離れ、川を一本渡れば東京を出てしまうこの公園でも、数こそ少ないがそんなカップルを見ることができた。

ただ繁華街と違うところは、人目が少ないせいか密着度も高く「イチャイチャ」と言う可愛い表現を越えてしまっているカップルも一組や二組ではなかった。街灯に照らし出されるベンチでさえ、キスどころか男の手は胸やスカートの中へ伸び、女の口からはくぐもった喘ぎ声が漏れている始末。一見やりすぎのように思えるが、このくらいはまだまだ序の口、もっと大胆なカップルだっているのだから恐れ入る。

駅から程良く離れた川沿いの大きな公園と言うこともあって、至る所に植えられた木が都合良く死角を作り出し、見えないところでは多くの盛り上がったカップルが励んでいることだろう。

性欲がなくなったら人類は滅んでしまう――

誰が言ったか知らないが、なんとすばらしい言葉なのだ。品のない表現かもしれないが、性欲があるからこそ人類は数を増やし進化し続けてこられたのだから、これこそ的を射た真実の言葉なのかも知れない。

まぁ、そんな飛躍した考えは置いておくとして、この体たらく……万物の長たる人間。高い知性を持った唯一の生き物でありながら、美しい夜空を愛で、静かな夜を楽しむ心はどこへ行ってしまったのだろう。なんとも嘆かわしい話である。

ＳＥＸを秘め事と教育したのは遠い昔。今では欧米並のフリーＳＥＸ時代が到来している。しかも、世界有数の治安国家「日本」。こうした公園が、お金のない若者やプレーの一環としてホテル代わりに使われるのは、至極自然な時代の流れなのかも知れない。

名ばかりの静かな夜――

恥ずかしそうに薄い雲を羽織った満月を黒い影が横切った。

パタパタと言う羽音からするとコウモリだろうか？

結構大きな羽音を立てている生物は香り立つ色香に吸い寄せられたのか、カップルの頭上をくるりと旋回すると呆れたように飛び去っていく。そして、決して小さくない独り言が何処からとも無く聞こえてくるのだった。

「なんだってんだよこのカップルの量は！　これじゃあ、どこに隠れているかわからねぇじゃねぇか……ったく、人間ってのはいつからこんな節操のない動物になっちまったんだ」

愛し合うカップルを邪魔する台詞は、パートナーを作ることができない嫌がらせか、はたまた新世代について行けない嘆きの声か……

しかし、その無粋な声はカップルの上を飛び回る黒い影から聞こえていた。
まさか言葉を話すコウモリ……
いや、その姿は翼こそコウモリの羽根を持っているが、見たこともない生き物であった。
その姿をなんと表現すればいいだろう。例えるならボーリングの球？
30センチ程の黒光りする球体から手のように羽根が生えており、デュアルライトのような大きな目。躰の大半を占める切れ込んだ口の両脇からは牙が顔をのぞかせている。それだけ《変》だと言うのに、先端を矢印のように尖らせた触覚と長い尻尾が付いているところが更に異様さを際立たせていた。
いったいこの生物はなんなのだろうか？　きっと国立図書館に所蔵されている動物図鑑でも探すことはできないだろう。
しかし、こんな丸い躰でよく飛べるものだ。どう考えたって躰に対して羽根が小さすぎる。いや、そもそも大して羽ばたいてもいないので、どうして飛んでいられるのかもわからない。思わず「羽根なんて関係ないじゃん」とツッコミを入れたくなる程である。
そのアンバランスな体躯は不気味と言うより滑稽であった。加えて人の言葉まで話すのだから、捕まえて見せ物小屋でも作ったら巨万の富を稼ぎ出してくれるだろう。いやいや、そんな面倒なことをしなくとも何処かの研究機関に持って行けばかなりの金額で買い取ってくれるに違いない。
そんなバカな想像を駆り立てる奇怪生物は、一通りベンチのカップルを見て回ると立木の中へと羽根を向けた。
「しっかし、ペオル様も軽く言ってくれるよ。そう簡単にキャッチャーが見つかるかっての。『いいからサッサと行け！』って言われたって、こんな時間じゃアイツ等を探すくらいしかできねぇし、見つけたところでキャッチャーがいなけりゃ面拝むことしかできねぇじゃん」

止まることのない不平を垂れ流しながら、奇怪生物は木の間を縫うように飛んでいく。その行動はまるで隠れているカップルを数えているかのようであった。

ここで疑問が一つ。小うるさく飛び回る奇怪生物に、なんで誰も気が付かないのだろう？

百歩譲って黒すぎて姿が見えなかったとしよう。だが、壊れたラジオのように雑音を振りまいていたら大抵の人間は気になるはずである。それなのに誰一人として気にする様子がない。

血気盛んな若者にとってこの程度の雑音など気にならないのかも知れないが、いくらなんでも気にしなさすぎである。

欲望を目の前にしているからと言っていくらなんでも鈍すぎやしないか？　人間はそれ程無頓着になってしまったのだろうか……

いやそれは決して違う。雑音に耳を傾けないのは、若いからでも夢中になりすぎているからでも、ましてや鈍いからでもなかった。奇怪生物が発する言葉や羽音は、夜空に浮かぶ月が吸いとってしまったかのように夜の闇に消え、人々の耳に届いていないのである。それどころか奇怪生物の姿すら見えていないのだから気づくわけがない。

そうやって奇怪生物は誰にも見つかることなく夜の公園を飛び回っているのであった。

「確かにこっちの方から感じるんだけどなぁ。アイツ等も身を隠す場所はわかってるってことか。全く面倒臭ぇ。人間にゃ見えねぇけど、奴等には見えるんだよなぁ。今の状況。絶対俺様の方が不理じゃねぇか」

奇怪生物はさらに声を大きくして、誰にも聞こえない不満を漏らし続けた。

「ったく。なんで俺様が気を遣わなくちゃならねぇんだよ……」

気を遣うなどおこがましい投げやりな飛び方をしているが、これでも本人はかなり気を遣って飛んでいるらしい。しかし、この奇怪生物はなんの目的で夜の公園を飛び回っているのだろうか？

カップルの生体を観察している訳ではないだろう。それでは誰かを捜しているのか？

「アウッ……ハアァァ……ウウゥゥン……」

そんな中、遠慮もナシにと言うか、我慢できなかったと言うか、とにかくハッキリとした喘ぎ声が聞こえてきた。

「んっ？　こっちにもいるのか」

声は木々が立ち並ぶ奥の奥から聞こえてくる。街灯も少なくいかがわしいことをするにはうってつけの場所がこの奥にもあるらしい。

声のする方に羽根を向けると発信元は直ぐに見つかった。そこは十畳程の開けた場所で、昼間木陰で休めるよう作られた背もたれのないベンチが中心に置かれている。

そんな大胆な場所で少女がベンチにすがるように両手をつき、背後から攻められていた。しかもそこにいたのはカップルだけではなく、月明かりを避けるように身を隠している男が数人、自らの股間を握り息をひそめていた。

覗き魔達を意識してか、男は腰の動きを早くすると「もっと見ろ」と言わんばかりに少女を半裸に剥いていく。タンクトップと共に捲りあげられたブラジャーは下着の役目を放棄し、あらわになった大きな胸が突かれる度にたわわに揺れた。ミニスカートは細いウエストで丸まり、黄色と白の縞々パンティーは、太ももまで下げられ拘束具のように動きを封じている。そして、溢れ出した愛液が月明かりを浴び怪しく煌めいた時、少女の口から幸せそうな言葉が漏れた。

「アッアッ……ダメッ……そんなにしたら……またイッちゃうよ。ほら……ほらぁ……」

少女は虚ろな瞳を向けると言葉と裏腹に小さな笑みを浮かべた。

なんといやらしい笑みを浮かべるのだろう。経験したことのない男ならその顔を見ただけでイッてしまいそ

うである。現に覗いていた何人かはその表情をオカズに果ててしまっている。
「声がデカイぞ。周りに聞こえてもいいのか」
唇を歪め意識しながら腰を捻る。少女も視線に気付いているのか、観客に贈るように淫猥な台詞を並べた。
「だって……気持ちよすぎちゃって……こ、こんなに感じたの始めてなんだもん……ダメッ……声なんて我慢できないよ……ハアァァァ……イクッ……イッちゃうぅぅ……」
ＡＶ女優のように絶頂を宣言すると少女は全身を振るわせた。
汗がいやらしく飛び散る――
すると男はそれを待っていたかのように首筋に唇を添えると強く吸った。途端、少女の躰が快楽を訴えるように反り返る。
「凄い……凄いヨォ……凄く気持ちいいヨォ……おかしくなっちゃう」
吸われることで快楽が強くなっているのか、少女は瞳を見開き快楽に耐えていた。先程の笑みといいこの苦しそうな顔といい、どちらも男を狂わせるいい表情だ。
首筋には撃墜マークのようにいくつもの痕が残っている。男の性癖なのか絶頂を迎える度にキスマークを残しているのだろう。
月明かりに照らされて少女の首筋に唇を添える姿は、古のバンパイアのように見えるが、激しく動き続ける腰がそのイメージをいちじるしく壊していた。
「ダメッ……ダメだって……今、イッてるところなんだから……そんなにされたら止まらなくなっちゃう……」
7秒間と言われる女の絶頂を遙かに越え、快楽は休むことなく少女の躰を襲い続け、何度も快楽の痙攣を呼び寄せている。

その姿のなんと美しいことか――

絶頂を迎える女は特に美しい。その美しさを自然までも歓迎しているように、葉の隙間から差し込む月明かりが、キメ細やかな肌に流れ落ちる玉のような汗に反射しキラキラと輝いていた。その美しい輝きは、まるで少女自身が輝いているようである。

「アッアッ……イッたばかりだから……もうちょっとゆっくり……お願い……少しだけでいいから……」

こんな可愛らしいお願いをされたら、どんな男だって言うことを聞いてしまう。いや、むしろその逆か……

「そうか、それならもっと頑張らなくっちゃいけないな」

男は器用に中腰になると少女の躰を起こし、突き上げるように攻め始めた。

「ダ、ダメェ……下からなんて……そんなことされたら……」

新たなる快楽に、少女の躰は間髪を入れず絶頂へと登っていく。

激しさを増して行くＳＥＸを見せつけられ興奮を高める覗き魔達――

その中でただ一人、と言っていいのかわからないが、奇怪生物だけが木の陰に隠れ、冷静な瞳で荒ぶるＳＥＸを見つめていた。

「あいつがそうか、堂々とやりやがって。もうちょっと遠慮しやがれってんだ」

なにを怒っているのか、憎々しげに男を睨み付けると小さな罵声を口にする。

「ま、また……イクゥゥゥ！」

遠慮のない喘ぎ声が可愛らしい唇から溢れ出した。きっとかなり広範囲に響き渡ったことだろう。なんだか空気がざわついている。

そのなんとも気持ちよさそうな声を聞きながら、男はなんの躊躇もなく少女の中へ精液を放った。当然、少女に吸い付きながら……

「で、出てる……気持ちいい……出てるヨォ……」
子宮に注ぎ込まれる精液にまで感じているのか、霞んだ瞳で月を見上げると精液を搾り取るように腰を動かし最後の快楽を味わっている。何処までいやらしい娘なのだろう。
「ハアハアハア……」
最後の体勢がきつかったのか、男は中腰のまま息を荒らげている。少女もまた刺し貫かれたまま大きく肩で息をしていた。
そして十数秒後――
男はゆっくり躰を起こすと男根を抜いた。
「アウッ……ダメェェ……」
名残惜しそうに愛液が糸となって煌めいたが、一瞬にして月の光に溶け込むと見えなくなってしまう。そして、男は静かに少女をベンチに寝かせる。

半裸のままベンチに転がり、淫猥な笑みを浮かべる美少女……

「気持ちよかっただろ」
美に愛された少女にそんな無粋な言葉が投げかけられる。
この男は正気なのだろうか？　何度抱いても飽き足りない美しい少女が目の前で喘ぎ、男根も熱い血潮をみなぎらしているというのに、瞳だけが冷たく少女を見下ろしている。
「う、うん……だから、もっと……もっとしてぇぇ……」
潤んだ瞳で男根を見つめながら掻き消えそうな声が漏れた。男はそんな魅惑の呪文も聞かず、少女のスカー

トで濡れた男根を拭うとそのままズボンを履いてしまった。
「もう十分楽しんだよ。お前も早く服着た方がいいんじゃないか。そんな格好してると誘っているようにしか見えないぞ」
そう言いながら周りに視線を置いていく。その視線、好きにしろとでも言っているかのようだ。しかし、快楽の余韻に浸っている少女の耳にそんな忠告など届いていないだろう。もし届いていたとしても、快楽に侵された躰では指一本動かすこともできない。
しかし、この二人はカップルではなかったのか？
その冷酷な視線はとても愛する者を見る瞳ではない。
「それじゃあな。この後も楽しんでくれ」
男はもう一度辺りを見回してから、怪しい言葉を残してその場を立ち去った。
静寂が辺りを包む――
半裸のまま放置され、甘い吐息を漏らす少女――
危険で異様な状況――
周りでは今も覗き魔達が生唾を飲み込み瞳をギラつかせている。いつ犯されてもおかしくない、危うい時間がゆっくりと流れていく……
だが、勇気の出ない覗き魔達は、気持ちよさそうに瞳を閉じる少女を息を殺して見つめていた。
そして数分後――
我慢できなくなった一人の男が、更に重い罪に問われると知りながら、吸い寄せられるように少女に近づいていった。
「お、おい……」

恐る恐る声をかけるが、少女は一瞬けだるい瞳を向けただけで再び瞳を閉じてしまう。その反応をどう受け取ったのか、男は震える手を胸のふくらみに置いた。

「ハアァァ……」

小さな喘ぎ声が張り詰めた空気を揺らす。

「……！」

その反応に驚いた男は慌てて手を引くと大量の汗をかきながら少女を観察した。そして霞んだ瞳と柔らかな少女の微笑みに、男は理性が崩壊していく音を聞いた。

「ハアハアハア……やってやる。やってやるぞ」

震える手でズボンを脱いだ男は、脚を抱え上げると愛撫もせず膨れあがった男根を深々と差し入れだ。

「ハアアァァァ……いいのぉ……気持ちいいぃぃ……」

途端、歓喜の喘ぎ声が上がる。少女は乱暴な挿入すら快楽に変えているのか、自らも腰を振って応えていた。溢れ出す愛液の音と喘ぎ声には淫靡な電波が含まれているのか、一人また一人と男達が木の陰から這い出してくる。

「ハアハアハア……」

たがの外れたハイエナ達は、少女の周りに集まるとマーキングするかのように少女の躰に精液を放っていく。無抵抗のまま汚されていく少女――

だが、その瞳には幸せの色が浮かび、更なる快楽を欲するように連なる男根へ手を伸ばしていくのだった。

犯され続ける少女を無視し、上空では奇怪生物が見えなくなった男の後ろ姿をジッと睨み付けていた。

「バッチリ覚えたぜ。今のうちせいぜい愉しむがいいぜ。さぁ、俺様も早いところお人形を見つけねぇとな」

不適な台詞と同様、丸い目と大きな口が悪そうに歪んでいた。

そして、少女が絶頂に達する歓喜の旋律を背中で聞きながら、奇怪生物は月の綺麗な夜へ溶け込んでいくのだった。